

# 「ちはやぶる」幻想

——清濁をめぐる——

吉海 直人

〔要旨〕百人一首業平歌の初句に関して、「ちはやぶる」と清音で読むか、「ちはやぶる」と濁音で読むかという問題が存する。従来は全日本かるた協会の読みを尊重して、「ちはやぶる」と読むことが通例だった。ところが最近「ちはやぶる」というマングが流行したことにより、書名と同じく清音で読むことが増えてきた。そこであらためて清濁について調査したところ、『万葉集』では濁音が優勢だったが、中古以降次第に清音化していることがわかった。業平歌は『古今集』所収歌であるし、まして百人一首は中世の作品であるから、これを『万葉集』に依拠して濁音で読むのはかえって不自然ではないだろうか。むしろ時代の変遷を考慮して「ちはやぶる」と清音で読むべきことを論じた。

〔キーワード〕百人一首・かるた・枕詞・清濁

## 一、二つの清濁問題

百人一首に撰ばれている在原業平の「ちはやぶる」歌には、二つの清濁問題が同居している。一つは古注と新注で対立している「くぐる」（濁音）か「くくる」（清音）かという問題である。これに関しては新注の賀茂真淵が『古今和歌集打聴』や『宇比麻奈備』で「括り染め」説を提唱して以来、ほぼ「くぐる」（清音）が定説となっている。ただし『顕注密勘』（顕昭の注に定家が書き入れたもの）によると、肝心の定家は「くぐる（潜る）」説を支持していたことがわかっている。『古今集』の解釈は真淵説でいいとして、百人一首の解釈としては「くぐ

「(濁音) 説を採るべきだとの意見も捨て難い(1)。要するに清濁には作品の解釈が反映しているのである。

もう一つの清濁問題は、必ずしも論争にはなっていないようだが、競技かるたの読み「ちはやぶる」(濁音)と落語「ちはやふる」(清音)が対立している。ただしこれは枕詞なので、清濁による意味の相違は認められない。また従来は相手が落語ということ、「ちはやぶる」の正当性が揺らぐことはなかった。ところが近年、末次由紀のマンガ「ちはやふる」が大ブレイクし、それがテレビで放映されたり、実写版(広瀬すず主演)の映画が上映されるに及んで、必然的に音声を伴うこととなり、再び書名とかるたの読みの違い(清濁問題)が浮上してきた(2)。

もちろん競技かるたをテーマとしたマンガだけに、書名をあって「ちはやふる」(清音)にしていることに対して、作者の末次由紀氏はツイッターで、

ちはやふるは、そのまま濁らず発音します。日本語的に正しいのは「ちはやぶる」なんです。千早が子供の頃「ちはやふる」の百人一首を初めて見たときの気持ちです。独自のものと思ってください。正しくは「ちはやぶる」。

でも混乱しちゃいますね。

と断り(弁明)の一文を表明している。ただし「ちはやふる」は上の句であるから、ひらがな清音表記の取り札(下の句)とは違う。最近の読み札の漢字のルビはすべて濁音になっているので、これは読み札のことでもなさそう。主人公千早が始めて見た百人一首が何だったかはわからないが、ひらがな(清音)で表記されていたというのであれば、「ふ」をどう読むかとは無関係だったことがわかる(3)。これは視覚と聴覚の違いでもある。

それとは別に、末次氏は「日本語的に正しいのはちはやぶる」・「正しくはちはやぶる」と繰り返しているが、本当に濁音で読むのが正しいのであろうか。そのことはきちんと検証されているのだろうか。そのあたりが不明瞭なので、あらためて「ちはやぶる」の清濁について検証してみることにした次第である。まさかマンガから問題提起されるとは思ってもみなかった。

## 二、辞書の説明の揺れ

早速、権威ある大きな辞書類で調べてみたところ、辞書からして微妙に説明が異なっているところがあった。まず角川書店の古語大辞典では、見出しからして「ちはやぶ／ぶる」と併記されており、その上で、

「ぶる」は動詞（上二段活用）を作る接尾語「ぶ」の連体形。「いははやぶ」の連体形とも考えられる。中古以後「ちはやふる」と清音化しても用いられ、『日ポ』には

「Chiyafuru」の形で出ている。

と説明されていた。これによれば上代では濁っていたが、中古以降は清音でも用いられていたことになる（清濁両用）。さらに室町期の日葡辞書では清音表記（ちわやふる）になっており、濁音から清音へ徐々に移行していることが読み取れる。だからこそ見出しが清濁併記されているのであろう。

これに対して小学館の日本国語大辞典では、「ちはやぶる」という濁音表記の見出しで、

動詞「ちはやぶ」の連体形から。中世・近世は「ちはやぶ

る」「ちわやふる」とも。

と記されていた。角川との違いは中古に関するコメントがなく、中世・近世には清音でも発音されていたとある点である。また清濁以外に「ちは」か「ちわ」という問題も提起されている。

では肝心の中古についてはどう考えればいいのか。日本国語大辞書でコメントされていないのは、上代と同様中古も濁音だということであろうか。そこでもう一冊、同じく小学館の古語大辞典を見たところ、やはり「ちはやぶる」という見出しで、

中古以降「ちはやふる」「ちわやふる」とも。

とあり、こちらは角川同様「中古以降」に清音で読まれることもあったと説明されていた。同じ小学館の辞書でありながら、説明にずれ（タイムラグ）が生じていることがわかる。もちろん百人一首が成立した中世以降に清音化されたとする点は一致しているわけだが、中古の清濁に関しては曖昧としかいえない。

そこで視点を変えて『歌ことば歌枕大辞典』（角川書店）を見たところ、なんと、

古くは「ちはやふる」と清音でいった。

と、古語辞典とは異なる奇妙な一文が記されていた。この説明を信じれば、最初清音だったものが『万葉集』で濁音化し、さらに中古以降再び清音化していったことになる。そんな変遷は実際に可能なのだろうか。これは何を根拠にしているのだろうか④。

こうして辞書類を調べたところ、「ちはやぶる」の清濁は案外謎にしていることがわかった。解決の糸口はどこに求めたらいいのだろうか。

### 三、上代の用例

前章で引用した辞書の説明によると、「ちはやぶる」は「いはやぶ」から来ていると説明されているものが多かった。そこであらためて『時代別国語大辞典上代篇』で「いはやぶ」を見たところ、祝詞鎮火祭にある「皇御孫の朝廷に御心一速比給はじ」が引用されていた。さらに「考」において、

「比」は甲類ヒを表わす仮名であるが、形容詞語幹に動詞性活用語尾ブがつくときは上二段であることが普通であ

り、仮名遣いと思われる。

と説明されていた。上代特殊仮名遣いで「比」は清音のはずだが、それを絶対視せずこは単なる仮名遣いであって、必ずしも清音を表わしているわけではないのである。これはかなり苦しい解説ではないだろうか。というより無理に濁音にしていることにならないだろうか。ひよつとすると前述の『歌ことば歌枕大辞典』で「古くは清音」とあったのは、この祝詞の「比」（清音）を念頭に置いてのことなのかもしれない（今のところそれ以外の根拠は見当たらない）。もっときちんとした説明が必要であろう。

いずれにしても「ちはやぶる」は「ちはや十ぶ」（上二段動詞）という言葉の成り立ちで説明されているわけだが、もう一つ有力な候補として「千磐破」という表記も少なからず用いられている。これについては『和歌大辞典』（明治書院）の「ちはやぶる」項で、

「千磐破人を和せと服従はぬ国を治めと」（万葉一九九）は下二段動詞で、凶暴で言いつけに従わない意を表す。

云々と説明されていた。こちらは「ちは（わ）十やぶる」という語構成であり、しかも活用は下二段（あるいは四段）になる

ので、上二段の「ちはやぶ」とは別語源とすべきであろうか。

この活用の違いは無視できないはずだが、参照した辞書類ではまったく問題にされていなかった。なんとも不思議な話である。なおこの「千磐破」表記こそは、日葡辞書の「ちわやふる」の元になっているのではないだろうか。

#### 四、万葉集の漢字表記

ここであらためて『万葉集』の用例を調べ、その漢字表記に注目してみたい。新編国歌大観（角川書店）で検索したところ、『万葉集』には十六例もの「ちはやぶる」が見つかった<sup>(5)</sup>。その漢字表記は、

千磐破（七回）・千石破（二回）・千葉破（二回）・  
千早振（二回）・千羽八振（二回）・千速振（二回）・血速  
旧（一回）・

知波夜夫流（二回）・知波夜布留（一回）

といささか複雑になっている。大まかにはA「破」系とB「振」系に二分できそうであるが、「千磐破」を含めた「破」系が九例と圧倒的に多いことに注目したい。

この清濁に関して、「破」「夫」という漢字は濁音で読むとされている。『万葉集』において「ちはやぶる」と濁音で読んでいるのもそのためであろう。ただし「振」は四段活用であるから、接尾辞「ぶ」（上二段活用）と同一視するのはためらわれる。また一例だけが「布」は清音とされているので、わずかだがこの一例の存在は看過できそうもない。

これについて旧全集本四四〇二番歌の頭注に、

原文に「知波夜布留」とあり、ここはフが清音であったと思われる。『古今集』の古写本に、チハヤフルのフが清音であることを示す点があり、『日葡辞書』にもチワヤフルとある。（『万葉集四』四〇八頁）

という興味深い記述が施されていた。旧全集は清音表記を重視して、四四〇二番歌は「ちはやふる」と清音で読むべきことを主張しているわけである。

それが新編全集になると、ややトーンダウンしており、中古以降ではこのチハヤフルの形のほうが一般的。

という短い記述に改訂されている。もちろん清音で読んでいくことに変わりはないのだが、目立たない記述になっていることは否めない。

ただしここに中古以降には清音が一般的と述べられている点には留意したい。もつともこの例が『万葉集』巻二十の防人歌であることを考慮すれば、積極的に例外（方言）とすべきかもしれない<sup>⑥</sup>。しかしこれは清音化の萌芽でもあるので、たとえ例外であつても、この例が中古以降の清音化へとつながっていると考えることはできそうである。

## 五、新注の主張

以上のように辞書の説明では、中古（中世）以降「ちはやぶる」は清音化しているとされていた。その証拠に室町期以降の百人一首古注の世界では、もはや清濁に関するコメントもないまま清音表記になっている。ところが江戸時代の新注に至って、あらためて濁音が主張されているのである。まず契沖の『百人一首改観抄』には、

此中のふもじ昔は濁りていへる証は古事記にも万葉にも夫の字をかけり。又万葉に千劍破（こ）とも千磐破ともかりてかけり。これ又濁れる証なり。（和泉書院本 九五頁）

と書かれている。「昔は」とあるのは、今は清音だからである

う。『古事記』や『万葉集』の例を引用して濁音を主張しているが、何故か「振」や清音の「布」の存在には言及していないし、濁音から清音への推移にも一切言及していない。これでは不十分であらう。

続いて賀茂真淵の『うひまなび』を見ると、

此事冠辞考に委しくすれば、ここには略けり。

（全集十二巻 四一頁）

とあつて論証が省略されているので、あらためて「冠辞考」に遡って「ちはやぶる」を見ると、

夫は本より濁れり。故に夫の仮字を用ゐ、破と借てかき、辞の意も濁るべき也。（全集八巻 一六四頁）

と、やはり濁音説が展開されていた。ただしここでも「振」及び清音表記の「布」には言及されていない。

たとえ『古事記』や『万葉集』が濁音だとしても、それが清音化していくことについては何故言及されないのだろうか。時代が下った『古今集』や百人一首でも、『万葉集』同様に濁って読むと考えて済ませているのだろうか。そこで『古今集』の用例を調べたところ、すべて濁音になっていた。もちろんこれは校訂者がそう考えたということである。残念ながら、ここに

清音を示す声点の存在は反映されていないようである。いずれにしても『古今集』における清濁は、きちんと検証されないまま濁音説が通説となつて継承されていることになる。

ところで江戸時代に流布している版本類は、契沖や真淵といつた少数の国学者による濁音主張とは無縁に、ほぼすべて清音表記になっている。落語の「ちはやふる」が清音なのは、なにも落語の都合ではなく、江戸時代に流布していた読みそのものが清音だったから、それを継承したまでのことだったのである。また古注を継承する注釈書の中にも、清音になっているものが少なくない。契沖・真淵の説を継承するものだけが、意識的に濁音にしているわけである(8)。

これを見る限り、江戸時代においては圧倒的に清音が主流であり、特殊かつマイナーな国学の狭い分野でのみ濁音説が叫ばれていたことがわかった。しかもそれはあくまで語源の問題であり、時代的変遷には一切言及されていなかった。

## 六、明治期の表記

肝心のかかるたにしても、既に江戸時代中期には大衆化(版彩

色)しており、国学の世界とは無縁に、江戸・明治を通じて清音表記になつていた。ただし手書きのかるたに濁音表記は認められないので、肉筆かるたの実物から清濁を判定することはできない。といっても江戸初期には清音が一般的だったであろうから、肉筆かるたも清音と見て問題なさそうである。

それが文字(和歌)も木版で印刷されるようになると、漢字には便宜的にルビが施されるようになり、合わせて濁音表記も加えられるようになっていった。そういつたかるたをざつと調べたところ、江戸後期から明治期までのかかるたはほぼ清音になつていくことがわかった。清音がかかるたの常識だったのである。

その調査の課程で、興味深いこともわかってきた。それは最初の競技用かるたである「標準かるた」(明治三十七年以降)の読み札が「ちはやふる」と清音になつていったことである。現在、全日本かるた協会は「ちはやぶる」と濁つて読むことを主張しているが、なんと最初に作られた「標準かるた」では「ちはやふる」と清音で読んでいたのである。それが大正十四年に「公定かるた」として大幅改訂された際、「ちはやぶる」と濁音で表記されるようになっていく。

何故この時、清音から濁音に修正されたのかは不明であるが、「公定かるた」の版元である東京図案印刷から出された『百人一首かるたの話』（大正十五年）を見ると、「読についての私見」の中で、「正しい」のは「ちはやぶる」（二三八頁）と主張されていた<sup>9</sup>。要するに競技かるたが「ちはやぶる」を濁音にしたのは、大正十四年のことだったのである。このあたりが清濁の境目だろうか。

では濁音が正しいとされる理由は何であろうか。それは明確な根拠があるというのではなく、『万葉集』重視の姿勢にあるのではないだろうか。百人一首の「序歌」を「難波津に」歌に制定した佐々木信綱は、『万葉集』の研究者としても知られている。また『百人一首講義』という当時のベストセラーの著者でもある。この本は明治二十七年初版刊ということで、歌の表記は「千早ふる」と清音になっていたが、語釈では「千早ぶる」と濁音になっており、表記が統一されていなかった。

大正・昭和に至って「ちはやぶる」（濁音）本文が急激に広まったようだが、その理由は勢いの強い・勇猛という意味を有する「ちはやぶ・いちはやぶ」を語源とすることで、「破る」という表記（語源）が積極的に選び取られ、濁って読む方が戦

時体制の日本社会の中で歓迎されたからであろう。競技かるたの読みは、そういった日本の時代背景に迎合して、濁音に修正されたのではないだろうか。もしそうなら、それは学問的とはいええない改訂だったことになる。

## 七、清音復活に向けて

以上、マンガ「ちはやふる」に触発されて、今まで気にも留めなかつた清濁をめぐって考察してきた。その結果、上代の用例に依拠する形で、『古今集』の「ちはやぶる」歌全九例までが濁音とされていることが明らかになった。

たとえ上代の用例が濁音であつても、その後で清音化していったことを重視すれば、『古今集』や百人一首は清音で読む可能性が存する（高い）はずである。そのことに言及せず、上代に遡って語釈を施して済ませ、それにひきずられるように本文まで濁音にするというのは、時代的変遷を無視していることにならう<sup>10</sup>。本稿の題名を「ちはやぶる」幻想」とした所以である。

実は最近の古語辞典においても、もはや清音には一切触れ

ず、「ちはやぶる」表記だけで済ませているものが少なくない。本稿では、そういった常識の落とし穴に陥っている事実をあぶりだしてみた次第である。

結論としては、必ずしも「ちはやぶる」(濁音)が間違っているわけではないが、だからといって絶対に正しいとも言いがたい。たとえば『古今集』が濁音であったとしても、だからといって百人一首まで濁音にするのはいかがであろうか。むしろ中世成立の百人一首は、濁音から清音への変遷を踏まえた上で、「ちはやふる」と清音で読むのが妥当ではないだろうか。それが無理なら、せめて清音化していったことくらいはコメントしていただきたい。

### [注]

- (1) 島津忠夫氏『百人一首』(角川文庫)は、藤原定家の解釈という観点からあえて「くぐる」説で掲載・解釈しておられる。百人一首の解釈としては妥当であろう。
- (2) マンガがこれほど大ヒットしなければ、清濁問題は取りあげられなかったであろうから、その意味でマンガ「ちはやふる」は、全日本かるた協会にとって「もろ刃のやい

ば」なのかもしれない。あらためて協会でも清濁の是非について真摯に再検討していただきたい。

- (3) 現在、競技かるたで使用されている大石天狗堂の読み札を見たところ、「ちはやぶる」と濁音で書かれていた。最近の読み札は濁音表記が普通のようなのである。唯一、北海道の下の句かるたの読み札だけは、今でも清音表記になっているようである。これは明治期の読みをそのまま継承しているためであろう。

- (4) 角川の古語辞典でも、「上代には「ちはやふる」と、根拠を示すことなしにコメントされている。

- (5) 全十六例の歌番号(旧番号)は、一〇一番・一九九番・四〇四番・五五八番・六一九番・一二三〇番・二四二〇番・二六六〇番・二六六二番・二六七一番・三三三六番・三二四〇番・三八一番・四〇一番・四四〇二番・四四八九番である。

- (6) 秋永一枝氏も「後者(布)は巻二十防人歌で確例としたい」(秋永氏「発音の移り変り」『日本語の歴史』大修館日本語講座6・一九七七年二月)と述べておられる。

- (7) ただし『万葉集』の中に「千劔破」という漢字表記は見

当たらなかつた。下つて『太平記』には認められる。

- (8) 本居宣長や平田篤胤も濁音になつている。衣川長秋の『百人一首峯梯』はF・V・ディキンズが英訳の際に活用した注釈書だが、賀茂真淵の説を継承しているために「ちはやぶる」が濁音になつてゐた。それを参考にしてゐるディキンズの表記も、当然濁音になつてゐる。さらにそのディキンズ訳を参考にしてゐるマッコレー訳も濁音表記だが、同じくディキンズ訳を参考にしてゐるポーター訳は清音表記になつてゐた。これはポーターがディキンズから借りて参考にした江戸後期の版本(千載百人一首倭寿)が清音表記になつてゐたからであろう。吉海『千載百人一首倭寿』の翻刻と解題」同志社女子大学日本語日本文学9・平成9年10月参照。「ちはやぶる」の清濁は翻訳(意味)にかかわらないものの、どちらで表記するかという問題は残る。この点に関してはカーロイ・オルシヨヤ「百人一首の英訳から見る「ちはやぶる」享受の変遷」同志社女子大学大学院文学研究科紀要17・平成27年3月参照。

(9) その他、「わたのはら」は中世において「わだのはら」

と濁つて読まれるようになっており、標準かるたも濁音だったが、公定かるたでは「ちはやぶる」とは逆に「わたのはら」と清音で読まれてゐる。

- (10) 同様の問題として人丸の「あしびきの」は、『万葉集』では「あしひきの」と清音で読まれているが、競技かるたでは『万葉集』に引きずられることなく「あしびきの」と濁音になつてゐる。こういった読み(清濁)を統一する基準は設けられていないようである。百人一首としてはこういった時代的変遷について、定家の時点での解釈を優先すべきであろう。

#### 〔参考文献〕

- 1 秋永一枝「発音の移り変り」『日本語の歴史』(大修館日本語講座6)一九七七年二月↓『日本語音韻史・アクセント史論』(笠間書院)二〇〇九年三月
- 2 和田早苗「ちはやぶる」から「ちはやふる」へ―服飾の視点から―『服飾美学』34・二〇〇二年三月
- 3 藤平泉「研究へのいざない 千早振る」『語文』129・二〇〇七年十二月

- 4 吉田金彦「枕詞「ちはやぶる」の成り立ち」『吉田金彦著作集2万葉語の研究下』（明治書院）二〇〇八年七月
- 5 伊藤聡「『ちはやぶる』をめぐって―歌語の神秘化―」『中世天照大神信仰の研究』（法蔵館）二〇一一年三月
- 6 森田貴之「千早城と「ちはやぶる」試論」南山大学日本文化学科論集12・二〇一二年三月

\*本稿は二〇一六年度同志社女子大学研究助成（個人研究）の成果の一部である。

